

埋蔵文化財センターの研究活動

1部6研究室、情報資料室と教務室からなる。部・研究室・各研究員がそれぞれの課題を定めて取り組んでいる研究はいうまでもなく、外部への埋蔵文化財の調査や保存についての研修を開催し、また各地で行われる発掘調査や保存事業について、地方公共団体や関係機関の求

めに応じて、専門的・技術的立場から指導と協力を行っている。これらの事業内容のうち、研究活動について、研究課題とその成果の一部を紹介する。

研究課題：遺物による考古史研究、古代官衙遺跡等の調査研究、文化財の自然科学的手法による調査研究（動植物遺存体による環境考古学的研究・年輪による古気候と年代測定に関する研究・広域遺構探査法の開発研究）、文化財の自然科学的手法による保存修復に関する研究（常時微動測定による古建築の構造と保存に関する研究・有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究・文化的景観の保存に関する研究）、文化財情報システムの構築と活用法の研究（劣化写真のデジタル画像による復原・全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究・文化財情報ネットワークにおける通信法の研究・遺跡地図情報システムの開発研究）

古代官衙遺跡等の調査研究 昨年度以来の地方官衙や官衙関連遺跡、豪族居宅遺跡などの資料収集作業と分析作業を継続して行い、秋からその成果の一端を、遺跡データベースとして全国に公開した。郡衙関係では、正倉検出例の収集を行い、3月に全国の考古・文献史学の研究者を集めて「郡衙正倉の成立と変遷」という研究集会を開催し、正倉の成立と展開のあり方について討議した。豪族居宅に関しては、建物群の設置状況から3類に大別して階層差を抽出するとともに、集落内における倉庫群を豪族私有の収納施設との観点から再検討する必要があること、存続期間が短期であるという特徴があり、そこに経営拠点の移動や宅地の財産継承の未熟性がうかがえること、などの知見を得た。

劣化写真のデジタル画像による復原 1996年度から開始したデジタルによる画像復原は、2年間で飛鳥寺や飛鳥藤原宮跡発掘調査部保管の4×5判カラーポジの入力を全て終了した。また、九州地方に多く存在する彩色壁画古墳を銀塩写真で撮影し、それを同じように高画質のプロフォトCDでデジタル化し、画像処理することによって、今までは発見されていなかった新しい「壁画」の発見に大いに役立っている。

文化財情報ネットワークにおける通信法の研究 遺跡に関する情報を管理する場合の項目設定や、活用方法についての交換標準を検討した。ネットワーク上の情報の管理として、メタデータ一般についての検討を行い、さらに埋蔵文化財関係の情報に特有の項目について考察した。多くの関係者の意見を求める必要があるため、全国の埋蔵文化財関係者らの参加による「遺跡情報管理に関する検討会」を開催し、種々意見交換を行った。

全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究 全国遺跡データベースについて、分野別の遺跡地名表及び近年の報告書抄録を活用して、データの充実を図った。また、全国の遺跡情報のクリアリング・ハウス構築に向けて、問題点を検討した。その結果、全国の遺跡情報のコアの情報を奈文研が提供することとなった。

(沢田正昭/埋蔵文化財センター)